龍族

RYUZOKU

第 21 号

南天会

令和 3 年

4 月 14 日

Dr. Babasaheb Ambedkar

アンベードカルの仏教改宗運動についての一私見

～それは、「改宗」という名の下での「宗教」脱出による自立「思想」への革命実践であった

関根康正（京都精華大学客員教授・文化人類学）

三人の文化人類学者（根本達、鈴木晋介、関根康正）と一人の仏教学者（志賀浄邦）からなる「B．R．アンベードカル及びエンゲイジド・ブッディズム研究会」（通称ＢＲＡ研）の活動は遅々たる歩みであるが、確実に前進している。今回は、その途中経過報告の一部として、メンバーの関根康正が一私見を述べるにすぎないが、それも言うまでもなく4人のメンバーからなるＢＲＡ研のこれまでの研究会の成果が基盤になっている。

関根による一片の覚書としてお読みいただきたい。この覚書は、アンベードカルはなぜ仏教徒への改宗を決意し実行したのかという問いに光を当てることにある。これまでも繰り返されてきたこの問いの読み解き方に、文末の参考文献に示した四著を主たる根拠としつつ、ひとつの示唆を与える試みである。すなわち、不可触民民衆を「ブッダの教え」（ダンマ）の下に糾合するという、いわゆる仏教への集団改宗による平等社会の実現に向けたアンベードカルの実践は、いかなる論理でなされたのかを素描してみようと思うのである。その実践は、ブラーマン中心主義の「宗教」（この鍵括弧つきの宗教の用法については次の段落で説明する）であるヒンドゥー教に縛られた社会に不可触民差別を自浄的に解決することを期待するのは不可能であるとのアンベードカルの絶望に裏打ちされた決別の判断がまずあった。ではそのような「宗教」に決別してどこに向かうべきなのか。先取りして言うと、その答えをアンベードカルは「思想」（これも次段落で説明）としての「ブッダの教え」に見いだした。その神依存ではない「思想」の説く自立的な平等主義に差別解放の可能性と希望を託そうとしたのであった。以下に、このようなアンベードカルの決断の内実の理路を私なりに考察したものである。

ここで重要なことは、「宗教」と「思想」の相違である。常識的な理解では、ヒンドゥー教やキリスト教やイスラーム教そしてシク教などと共に、仏教もまた一「宗教」であるとされる。しかしながら、今日見られる組織化され、その内部に階梯を有する仏教教団のあり方を一挙に遡及して、ゴータマ・シッダールタという人物が悟りを開き、その後サンガの出家者と在俗の衆生に説いた「ブッダの教え」にまで立ち帰るならば、神という絶対的な存在を前提にしないどころか、自覚的にそういう固定された絶対的存在を否定していることは明らかで、仏教の原型は、先に示した前者三つの「宗教」とは明確に一線を画する。この絶対的な存在の神に依存した人間の生き方を説く宗教を「宗教」と呼ぶならば、その意味では「ブッダの教え」（ダンマ）は「宗教」ではない。相対性の世界の無常を説いた教えは、人間一人一人の涅槃（ニルヴァーナ）の実現への自発的・自立的な覚醒への道の辿り方を説くものであった。ブッダの創始したサンガは指導者なき組織であった。ブッダは自覚的にサンガをそのように維持した。出家者からなるサンガも一人一人の出家者が自立的に八正道をきわめてニルヴァーナを体得するための切磋琢磨の場に過ぎない。そこでは一人一人がカルマ即ニルヴァーナを目指す。それは在家信者のために理想的な生活モデルを提示し続ける意義を有する。サンガも在俗衆生もこの世の四苦八苦にいかに向き合いいかに脱するかという共通の目標を本願として共有している。これはいわば、神も指導者も絶対化しないことに見て取れる無頭的な自立「思想」こそが、「ブッダの教え」の核心であることをよく示している。

ここで取り出したいことは、アンベードカルはこの「ブッダの教え」という仏教の原点に立ち返って仏教を「宗教」としてよりも「思想」としてとらえていたと解釈するのが自然であるという点である。そのことは、その渾身の著書『ブッダとそのダンマ』を読めば明らかである。アンベードカルは、この「思想」としての「ブッダの教え」を仏教理解の根底に据えることこそが、「宗教」としてのヒンドゥー教を根底的に覆すことを可能にすると判断し、不可触民解放運動の理論武装として自覚的に「ブッダの教え」としての「仏教」への改宗を選びとったに相違ない。アンベードカルの仏教理解を科学的合理性に基づく浅いものだとみなして批判する向きがあるが、そのような批判者の見方自体に重大な瑕疵がある。というのは、理解が浅いのはそういう批判者の方であって、アンベードカルの合

理的仏教理解こそが、「ブッダの教え」が有する神秘的な絶対的存在の否定と信者の自立思想の探究という意味での神否定の合理性に忠実なものと理解できるからである。つまり、「ブッダの教え」には、近代西欧的な人間主体の実体主義的合理性（人間実体主義であるから人間を超えた神の絶対存在も実体的に把握することになる）とは根本的に異なる人間無常の宇宙論的合理性で貫かれている。アンベードカルには両方の合理性が見えていたに違いなく、しかもそのうえで「ブッダの教え」を貫く後者の合理性に与したのであったろう。端的に言えば、アンベードカルはこの「ブッダの教え」の「思想」原理をこそ、「宗教」であるヒンドゥー教からの脱却のために用いたのである。その文脈からすれば、絶対的な神存在を有する「宗教」としてのキリスト教やイスラーム教やシク教への改宗は、アンベードカルの脱ヒンドゥー教のための選択肢としては無意味であることの理路が見えてくる。「宗教」から「宗教」への改宗では人間の自立的平等主義は実現できない。絶対的存在（神）を措定する依存的「宗教」からすべてが相対的な無常の自立「思想」への脱出の仕方こそが決定的に重要で、その意味ではアンベードカルにとっては「ブッダの教え」に始まる仏教以外に選択肢はなかったという理路になる。このように議論してくると、このアンベードカルのヒンドゥー教徒を仏教世界に導き入れた実践を「改宗」運動としてとらえる通常の理解が正しいのかどうか、疑問に思われてくる。すでに明らかなように、アンベードカルの真意においては、「宗教」依存から脱して自立「思想」に人々が立つことこそが、慈愛に満ちた平等社会の実現に不可欠だという確信があったと解するのが妥当であろう。

「改宗」仏教徒を〈新仏教徒〉と呼ぶことは今日否認され、〈仏教徒〉と称する動きがあるが、それは、その一群の人々を「改宗」した者とする浅い理解（「宗教」から「宗教」へ移行したという理解）を払拭する意味で正しい。しかし、その呼称批判の真意をさらに徹底するならば、〈「思想」としての仏教の徒〉の誕生、すなわち「ブッダの教え」を自らの生きざまの道標にする人々の存在の誕生と言わなければならない。少なくともアンベードカルの見ていた世界は、そういう人間の自立による平等社会の実現という「思想」革命のことではなかったかと推察できる。『ブッダとそのダンマ』こそがその確かな証拠である。そのことを結果的に明らかにしてくれる興味深い事態がある。『ブッダとそのダンマ』の日本語訳の本には、山崎元一氏の解説と佐々井秀嶺師の解説が収められているのだが、そのコントラストがここでの立論をいみじくも鮮明にしてくれるのである。その二つの解説を読み比べると、歴史研究者であり、『インド社会と新仏教』の著者山崎元一氏が「宗教」として仏教をとらえて解説しているのに対して、仏教僧である佐々井師の方がむしろ差別社会の現実にコミットメントする「思想」として仏教をとらえているという逆説が見て取れるのであった。佐々井師の解説においては、アンベードカルがブッダそしてナーガルジュナの「思想」革命の精髄を自己と社会の同時救済としての不可触民解放運動において根幹に据えたことが語りだされ、その不滅の法灯を佐々井師自ら引き継ぐ覚悟の言葉がほとばしり出ていて、圧倒される。こうして、ブッダ、ナーガルジュナ、アンベードカル、佐々井秀嶺の間に認められる非連続の連続という「無自性＝空＝縁起」の奇跡のダイナミズムを感得するのである。このトピックに関しては、すでにメンバーの仏教学者志賀浄邦氏による周到な研究蓄積があり、直近の包括的な議論を展開しているものが参考文献に掲載したものである。仏教史に門外漢である筆者は、言うまでもなく、それに多くを負っていることもお断りしたい。

最後に蛇足ながら記すと、こういう「思想」革命の系譜を正しく理解するためにも、やはり宗教や改宗と言った概念の安易な使用に対して、概念史の再検討あるいは概念の系譜学が求められていることを認めざるを得ない。

ここには、今後さらに詳細に検討されるべき覚書を記したのみである。ご批判をいただきつつ、探究を進めていきたい。

参考文献

＊志賀浄邦　口頭発表「アンベードカルの改宗論：〈知的亡命〉としての仏教への改宗」（2020年11月13日（金）B.R.アンベードカル研究会（オンライン開催）発表）
＊B.R.アンベードカル 2004『ブッダとそのダンマ』（山際素男訳）光文社新書。
＊ワールポラ・ラーフラ 2016『ブッダが説いたこと』（今枝由郎訳）岩波文庫。
＊リチャード・ゴンブリッチ 2018『ブッダが考えたこと：プロセスとしての自己と世界』（浅野孝雄訳）サンガ。

（表紙写真：山本宗補撮影）

アンベードカル博士　年譜

ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル

1891 年　4 月 14 日誕生。
軍人であった父の配属先マディヤプラデーシュ州ムホウにて出生。
父ラームジー・マロージ・サクパール、母ビーマバーイーの 14 人兄弟の末子。家族の出身地は、コンカン地方（ボンベイ南方）のラトナギリ県アンバーワデー村。父母の家は共にマハール・カーストに属し、幼年期より様々な差別を受けて育つ。家族は父の転勤に合わせてダポリ、サーターラ、ボンベイと移り住んだ。6 歳の時、母ビーマバーイー死去。叔母のミラバーイーに育てられる。
ボンベイのマラータ・ハイスクールに進学し、後名門エルフィンストーン・ハイスクールに転校。
ハイスクール時代、目をかけてくれたブラーミンのアンベードカル先生の計らいにより、以後アンベードカルを姓とする。

1907 年　ハイスクールを卒業し、ボンベイ大学エルフィンストーン・カレッジに入学。
大学合格の祝賀会で、社会活動家のクリシュナジー・ケールスカルから著書『ゴータマ・ブッダの生涯』を贈呈される。ケールスカルは経済的に苦しいアンベードカルをバローダ藩王サヤジラーオ・ガイクワードに紹介し、藩王からの援助を得ることになる。
この年 17 歳で、9 歳のラーミ（ラーマバーイー）と結婚。

1912 年　大学で文学士号を取得。

1913 年　1 月、バローダ藩王国軍に就職。その数日後、父死去。
6 月、バローダ藩王の奨学金を得て、米国ニューヨークのコロンビア大学に留学。

1915 年　6 月経済学の修士号を取得。

1916 年　6 月哲学の学位で博士号を取得。イギリスに渡り、グレイズ・イン法曹院で法学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（ロンドン大学構成校）で経済学を学ぶ。

1917 年　ロンドン大学在学中に学資が底を尽き、インドに帰国。ボンベイに帰着するとバローダ藩王国の軍書記官に奉職。しかしここでも同僚や部下からの激しい差別に遭い、辞職する。
この年、会議派の「不可触民制撤廃決議」が採択される。

1918 年　アンベードカルは、イギリスによる選挙制度調査委員会（サウスボロウ委員会）に呼ばれ、不可触民の分離選挙と人口比率に応じた保留議席の設置を要求している。

1918 年-1920 年　ボンベイのシドナム・カレッジで教鞭をとる。

1920 年　コールハープール藩王シュリー・シャーフーの援助により『ムーク・ナーヤク（声なき者の指導者）』マガジンを発行開始。5 月ナグプールで第 1 回全インド不可触民大会が開催され、アンベードカルが演説し、その指導理論が勝利を収める。同年 7 月、大学での給与と友人からの借金、同藩王の援助を得て、研究を完了するために再びロンドンに向けて出発。

1921 年　6 月修士号を取得。修士論文『英領インドにおける帝国財政の地方分散化』

1922 年　法学士号を取得。学位請求論文『ルピーの問題』提出。
ドイツに渡り、ボン大学に留学。

1923 年　4 月インド帰国。10 月ロンドン大学博士号を取得。学位と弁護士の資格を得る。

（学生時代の肖像写真）

（弁護士資格を取得）

1924 年　6 月、ボンベイで弁護士事務所を開設、ボンベイ高等裁判所で法務を開始。
7 月、ボンベイで「バヒシュクリット・ヒタカーリニ・サバー（被抑圧者救済会）」を設立。
9 月、サマタ―・サイニク・ダル（社会平等軍）結成。

1926 年　ボンベイ州立法参事会の被抑圧階級保留議員メンバーに指名。 1934 年まで。

1927 年　3 月、マハード市で貯水池開放の抗議集会開催。
4 月、ボンベイでマラーティー語の隔週誌『バヒシュクリット・バーラト（抑圧されたインド）』を刊行開始。
12 月 25 日マハード市チャウダール貯水池でサティヤーグラハを主導。『マヌ法典』を焼く。

1928 年　ボンベイの公立法科大学教授に就任。
10 月、サイモン委員会（インド法制調査委員会）の諮問を受ける。

1930 年　3 月 3 日、ナーシクでカーラーラーム寺院への立ち入りを行うサティヤーグラハを開始。（同月、マハトマ・ガンディー「塩の行進」を主導）
8 月 8 日、ナグプールで全インド被抑圧階級会議開催。アンベードカル議長演説。
11 月、ロンドンで行われた第 1 次円卓会議に不可触民代表として出席。不可触民の分離選挙、保留議席を要求。

1931 年　8 月、アンベードカル、ガンディーと面談。9 月、ロンドンで第 2 次円卓会議に出席。会議上、ガンディーは不可触民の分離選挙、保留議席に反対する。

1932 年　8 月 17 日、イギリス政府は、各マイノリティごとの分離選挙に加え、被抑圧階級にも選択的期限付き分離選挙を認める「コミュナル裁定」発表。ガンディー、被抑圧階級への分離選挙認定に抗議して収監中のプーナ、イェラワダ監獄で「死の断食」に入る。アンベードカルはプーナに行きガンディーと面会。
9 月 24 日、「プーナ協定」に署名。分離選挙をあきらめ、保留議席数の増大にとどまる。
11 月、ロンドン第 3 次円卓会議出席。
ガンディー、ハリジャン奉仕者団設立。

1933 年　インド統治法改正を審議する英印合同委員会に参加。

1935 年　1 月ボンベイ公立法科大学の学長に指名。
5 月 27 日妻ラーマバーイーが死去。
10 月イェオラで開催された不可触民会議演説で、ヒンドゥー教からの改宗を宣言。

1936 年　4 月アムリトサルでシク教伝道大会に出席。
『カーストの絶滅』刊行。

1937 年　独立労働党を結成。新統治法下の州立法議員選挙でボンベイ州議会議員に選出。全国では国民会議派が多数与党となる。

（チャオダール貯水池サティヤーグラハ）

（第 2 次円卓会議：中央右にガンディー、右下アンベードカル）

（プーナ協定署名後イェラワダ監獄を後にする）

（1934 年アンベードカルファミリー：左より長男ヤシュワント、アンベードカル、ラーマバーイー、兄の妻、甥、愛犬トビー）

1939 年　第２次世界大戦勃発。インドはイギリスと共にドイツと交戦状態となる。会議派は独立を訴えて全州内閣を総辞職し、ガンディーは戦争不介入を表明。ジンナー率いる全インドムスリム連盟は戦争協力を主張。

1940 年　『パキスタン問題を考える』刊行。パキスタン分離独立を提案。スバス・チャンドラ・ボースと会談。

1941 年　７月インド総督府の国防諮問委員会メンバーとなる。

1942 年　３月、クリップス提案（インドのイギリス連邦国家への移行提案）。会議派指導者は反発。クイット・インディア（インドから出ていけ）決議採択。

７月、ナグプールで全インド被抑圧階級大会開催、全インド指定カースト連合結成。

アンベードカル、行政参事会（インド総督府内閣）メンバーに選任、労働大臣に任命される。

1945 年　６月『会議派とガンディーは不可触民に何をしてきたか』刊行。

７月、人民教育協会設立。

1946 年　６月、ボンベイにシッダールタ・カレッジを創設。７月ベンガル州から制憲議会議員に選出。

1947 年　７月インド独立法可決。８月 15 日インド・パキスタン分離独立。アンベードカル、会議派の支持を得てボンベイ州議会議員に指名される。ネルー内閣の法務大臣に任命。

８月 29 日独立インド連邦制憲議会は、アンベードカルを議長とする憲法起草委員会を任命。

1948 年　１月マハトマ・ガンディー暗殺。

４月ブラーミン出身のシャルダー・カビール博士（マイサヘブ・サヴィータ・アンベードカル）と結婚。

10 月『不可触民―彼らは何者だったのか。また彼らは何故不可触民になったか』出版。

11 月制憲議会に憲法草案を上程。

1949 年　11 月 26 日インド共和国憲法採択。

1950 年　１月 26 日インド憲法施行。

５月セイロンのコロンボで開かれた第１回世界仏教徒会議に出席。

1951 年　２月議会にヒンドゥー法改正案を提出。９月オーランガバードにミリンダ・カレッジを設立。

ヒンドゥー法案審議不調等を批判して、法務大臣を辞任。

1952 年　１月国会並びに州議会選挙。ジャヤプラカシュ・ナラヤンの社会党と共闘するも指定カースト連合は大敗。議席を失う。

３月ボンベイ州議会から中央上院議員に選出。

６月コロンビア大学より名誉法学博士号授与。

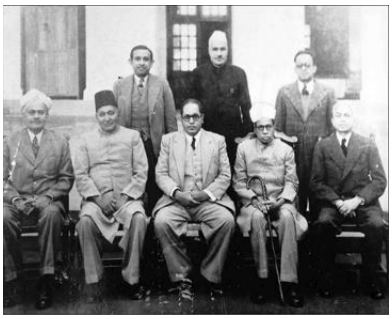
1953 年　１月ハイデラーバードのオスマニア大学より名誉文学博士号授与。

12 月政府が不可触民制(犯罪)法案上程。

1954 年　12 月ビルマのラングーンで第３回世界仏教徒会議に出席。

1955 年　インド仏教徒協会設立。５月ごろより健康悪化。

（サマター・サイニク・ダル）



（憲法起草委員会委員長）

（共和国初代法務大臣として）

（ラジェンドラ・プラサド大統領に憲法草案を提出）

（シャルダー・カビール博士と再婚）

1956 年　5 月ブッダ生誕祭に仏教への改宗を発表。
10 月 14 日、ナグプールで仏教に改宗。同日約 38 万人の不可触民が仏教に改宗。15 日にも改宗式が行われ、翌 16 日はチャンダ（チャンドラプール）に行き約 30 万人が改宗した。
11 月ネパール、カトマンズで第 4 回世界仏教徒会議に出席。帰途、ベナレス・ヒンドゥー大学で講義。サールナート訪問。
12 月 6 日、デリーにて死去。享年 65 歳。
7 日ボンベイのダダール・チョウパティ海岸（チャイティヤ・ブーミ）にて火葬。
1957 年　『ブッダとそのダンマ』刊行。
1990 年　4 月 14 日バーラト・ラトナ受賞。
2012 年　ヒストリーTV と CNN-IBN が主催する世論調査によって「最も偉大なインド人」に選出。

（1956 年 10 月 14 日午前 9 時、ナグプールでチャンドラマニ長老より五戒を受け仏教徒となるアンベードカル夫妻）

（改宗後大衆にスピーチする）

（アンベードカル博士関係地図）

（ネパールからの帰途サールナートにて）

ナグプール　ディクシャ・ブーミ

ムンバイ　チャイティヤ・ブーミ

デリー　国会議事堂前の銅像

参考資料：ダナンジャイ・キール　山際素男訳『アンベードカルの生涯』(2005 光文社新書)
山崎元一『インド社会と新仏教―アンベードカルの人と思想』(1979 刀水書房)
アナント・パイ編　村越末男訳『アンベードカル物語』(1985 解放出版社)
掲載写真：佐々井秀嶺資料室、Wikipedia、SYMBIOSIS SOCIETY'S DR. BABASAHEB AMBEDKAR MUSEUM & MEMORIAL
年譜作成：南天会事務局

ババサヘブ・アンベードカル博士
―功績をたどる
ラシュミ・マンワトカール

「心の養成は人間の存在の究極の目的であるべき」

ババサヘブ・アンベードカル博士として知られるビムラオ・ラムジ・アンベードカルは、インドの法学者、経済学者、人類学者、偉大な学者、作家、社会改革者であり、仏教運動を鼓舞し、不可触民に対する社会的差別に反対する運動を展開しました。インド総督府労働大臣、憲法起草委員会委員長などを歴任し、「インド憲法の父」と呼ばれています。

コロンビア大学で学ぶ

ババサヘブ・アンベードカル博士は、バローダのマハラジャ、サヤジラオ・ガイカワドから奨学金を授与され、アメリカのコロンビア大学に留学する機会を得ました。アンベードカルは、コロンビア大学から経済学の博士号を取得した最初のインド人となりました。1923年には、ロンドン大学から経済学の博士号を授与され、同年にはグレイズ・インの弁護士に任命されました。3番目と4番目の博士号は、1952年にコロンビア大学でLL.D.また、1952年にコロンビア大学でLL.D.、1953年にオスマニア大学でD.Litt.を取得し、名誉博士号を授与されました。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(イギリス)での研究

1916年10月、ババサヘブ・アンベードカル博士は、グレイズ・インの弁護士養成コースに入学した。同時に、1920年から1923年までロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに入学し、「ルピーの問題―その起源と解決策」と題して、現在議論されているデモネタイゼーションについての博士論文に取り組み、博士号を授与されたのでした。ババサヘブは、8年間の学業をわずか2年3カ月で修了しましたが、そのために1日21時間も勉強したそうです。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの図書館では、ババサヘブは朝一番に図書館に入り、夜最後に図書館を出る学生だったそうです。その間、食べ物を買うお金がなかったので、一日中、本の中に隠れてパンを一枚だけ食べていたそうです。ある日、図書館内で食事をしているところを司書に見つかってしまい、外で買って食べるように言われましたが、ババサヘブは「私には食べ物を買うだけのお金はありません」と言いました。司書はババサヘブの経済状態を知り、彼が非常に聡明で才能のある学生であることを知ると、それからは毎日、ババサヘブに自分の持っている食べ物を分け与えていました。

ババサヘブは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスから"Doctor All Science"という貴重な博士号を取得した世界初で唯一の人物です。これまでにも多くの学生がこの学位を取得しようとしましたが、成功した例はありませんでした。ババサヘブ・アンベードカル博士の著書「Waiting for Visa」は、コロンビア大学の教科書にもなっています。この大学は2004年に世界の学者トップ100のリストを作りましたが、そのリストの最初の名前がビムラオ・アンベードカル博士でした。彼は64の科目をマスターしていました。英語、ヒンディー語、パーリ語、サンスクリット語、フランス語、ドイツ語、マラーティー語、ペルシャ語、グジャラート語など9つの言語の知識を持っていました。また、世界のあらゆる宗教を21年間にわたって比較研究した。英国総督リンリスゴーは、ババサヘブは500人の卒業生や何千人もの学者よりも知的であると信じていました。

ババサヘブ・アンベードカル博士は抑圧されていたため、生涯を通じて、不可触民に対する社会的差別をなくし、インド国民全員の社会的・経済的な平等を維持するために戦いました。ババサヘブは、不可触民への教育を推進し、彼らの地位を向上させようとしました。ババサヘブは、マハド市のチャワダー池にある公共の飲料水を開放するための市民運動やデモ行進を始め、ナシク市のヒンドゥー寺院カララムに入る権利を求めて戦いました。

ババサヘブが50万人以上の信者とともに仏教に改宗したことは、世界最大の改宗であったため、歴史的な出来事となりました。ババサヘブを仏教に導いた偉大な僧侶は、ババサヘブを「現代の仏陀」と呼び、「菩薩―悟りを開いた存在」とも呼びました。

1990年、ババサヘブは死後、インド最高の民間人賞であるバラート・ラタナを授与されました。

ババサヘブ・アンベードカル博士は改革者であり、その遺産と関連性は拡大し続けています。ババサヘブ・アンベードカル博士の社会的平等のメッセージは、今もなお、時を超えてたくさんの人々に響き続けています。

ジャイビーム!! ナモ ブッダヤ!!

（BAIAEJapan メンバー）

全インド人女性が羽ばたくための羽をくれた方

ウルミラ・デーヴェーンドラ

女性とは社会の真の建築家であり、女性なしでは何事を達成することもできません。この事実はB・R・アンベードカル博士によって認知され、インド独立の闘争が最高潮を迎えた頃に女性抑圧への懸念とともに表明されました。

ジェンダー平等、経済的な自由、ジェンダー多様性の市民権獲得、リーダーシップ、ネットワーキングこそ、女性のエンパワーメントの真髄です。だからこそ、彼は女性のエンパワーメントを達成すべく、自身の献身を通じてそれを証明したのです。おそらく、インド史上最大の女性のエンパワーメント・キャンペーンの一つは、彼によって主導されたからこそ実現したといっても過言ではないでしょう。

女性は自身、エンパワーメントの彫像であり、常に表舞台の縁の下の力持ちとして精力的に働き、他の人々に力を与える存在です。しかるに、かつてのインドでは、人々の前に立って社会運動に参加する女性はほとんどいませんでした。そして、それは実際、女性にとっても容易な道ではありませんでした。

私が8歳の頃のある日、文盲で本を読めない祖母に私は、本を読んで、その中の韻文の意味を説明してくれるようせがんだことがありました。彼女は本が読めない理由を私に説明しようとしましたが、私にはなぜ彼女が本を読めないのか理解することができませんでした。とうとう、彼女は私に「よくお聞き。お前はとても幸運なんだよ。外に出て、学校に行き、いくらでもしたいことができる。自由に『木に触れて』おいで。私がいつでも見守っているからね」と言ったのでした。

それから、こう続けました。「私はお前くらいの年齢で結婚した。私は夫の2番目の妻で、20人子を産み、そのうち7人だけが生き残った。私が最後から2番目の子を産んだときには、娘も最初の子を産んでいたよ。身の周りを越えての行動は許されず、勝手にしゃべる権利もなく、一日おきに殴られる有様だったさ。私には自分の人生を謳歌する権利がなく、『わが家』といっても女は所属していないかのような男性中心社会で、奴隷のような生活を送っていたよ。お前は私にも話しかけてくれるようないい子だから、あまり説教臭いことは言いたくないんだが、いいかい。子ども時代が終わって母親になり、母親から年寄りとなる間には、女性であることを楽しむ時間などなく、まして人間らしさなど知る間もないまま人生は終わってしまう。そういうものなのさ。それでも私は、平等という権利を享受したお前達の世代をこの目で見ることができて幸せじゃよ。それもすべて、私たちの父であるババサーヘブ・アンベードカル博士のおかげさ！ジャイビーム！しっかり教育を受けて、みんなが誇りに思うような人になっておくれ」

その時の私には、彼女が言っていることの意味がよくわかりませんでしたが、その涙を湛えた眼差しがずっと忘れられませんでした。彼女はもうこの世にいませんが、彼女が話してくれた自身の体験は、まさに女性にとっての生き地獄とでもいうべきものでした。私は、自分が思い通りの人生を送るためには一番必要な自由である、思想の自由を享受できていることにとても感謝しています。そして、私がそうできているのはすべて、ババサーヘブ・アンベードカル博士のお蔭なのです。

21世紀の今日、私たちは今さらのように女性のエンパワーメントについて論じていますが、女性のエンパワーメントの核心部分は、偉大な革命家であるババサーヘブ・アンベードカル博士によって、既に計画・実行されていたのだと私は信じるものです。

彼はその生涯を懸けて、エンパワーメントのため、そして、仏教由来の平等、自由、友愛を即時に実現する民主主義の考えに則り、社会を再創造するという目的を果たすため奮闘しました。

アンベードカル博士は、女性の力と関与がなければ、社会改革のプロセスは無意味で無益なものになってしまうと信じていました。その達成のため、彼は女性たちに歴史的な「マハド貯水池のサティヤーグラハ」に参加するよう勧めました。1927年、アンベードカル博士は、300人の女性とその夫らの先頭に

立ち、「マハド貯水池のサティヤーグラハ」を率いました。サティヤーグラハでは、女性が男性と一緒に列をなして行進しました。そして、彼は女性たちに団結を鼓吹したのでした。

別の折に彼は、約３０００人の女性に話しかけて、次のように述べました。「私は、女性が進歩を達成することができた度合いにより、共同体全体の進歩具合を測る。結婚するすべての女子をして夫の横に立ち、夫の友にして対等な存在であると主張し、夫の奴隷とみなされることを拒否せしめよう。このアドバイスに従うなら、あなた方は必ず自分自身に名誉と栄光をもたらすことができる」

彼が先頭に立って、不公正で悪質な社会慣行への反対を唱えたとき、実際にひどくのさばっていたカーストに基づく社会的かつ惰性的な悪慣行の中には例えば、ヒンドゥー寺院に人を献納し仕えさせるデーヴァダーシー制、売春、および児童婚などがありました。彼はボンベイ立法議会で、女性の立場に立って家族を規定する措置を強く推進しました。

ババサーヘブ・アンベードカル博士は、売春を生業とする女性までも含め、階級的な社会システムとしての悪慣行に従事させられている女性の生活改善のため、その人生を捧げました。その最も顕著な例は、カマティプーラでの出来事に表れています。ボルデッロに、売春宿を所有し、女衒をしていたデイヴィッドという男がいました。彼は、ババサーヘブ・アンベードカル博士の思想と教えとに感化啓発され、その生業をやめました。そして、売春婦全員に、足を洗って名誉ある生活を送るよう呼びかけたのです。

バラモン(上位カーストのヒンドゥー教徒)的家父長制を矯正すべく、彼はヒンドゥー教徒と他のインド社会構成員ら双方のため、ヒンドゥー規定法案を起草することに尽力しました。彼はまた、女性のエンパワーメントは、女性の安全と、恐れから解放された幸福によってのみ高度に実現できると強く確信していました。彼はヒンドゥー個人法成立に貢献し、女性の福祉と公民権保護のためにインド共和国憲法に多くの女性福祉条項を盛り込むことで、女性に対し強力な憲法上の保障を提供しました。

この間、彼は上層部の多くの政治家から強い反発を受けました。これに対し、彼は大臣の職を辞し、彼ら政府高官らが女性の権利を受け入れないことに対する不満を表明しました。そして、さらには女性イスラム教徒らが抱える問題を強調しました。「プルダー」(スカーフ)制、仏教への集団改宗、女性イスラム教徒の法的権利追求を通じて、彼の世俗的で開明的なものの見方までが、世間で広く知られています。

つまるところ、単に彼は政治用語といったレベルだけでなく、インド共和国憲法の中にも女性の権利を盛り込み、女性の生活のあらゆる側面を保障しているのです。そして、恵まれない女性や、教育を受けていない女性らの間に意識を醸成し、差別や不正と戦うよう彼らを鼓舞したのでした。

彼はまごうかたなく、全インド人女性が歩む道の開拓者であり、彼女ら自身が空に羽ばたくための羽を与えてくれた方なのです。彼はまた、インド共和国憲法を通じ、呼吸する自由や合法的に考え表現する自由を女性たちにもたらしてくれました。

上記のようなこと全てを、私がここに記すことができるのも皆、ほかならぬ彼のお蔭なのです。ババサーヘブ・アンベードカル博士、ありがとうございます！

(中村龍海訳)

B・R・アンベードカル博士

革命家にして碩学、虐げられし者たちの救世主

デーヴェーンドラ・メーシュラム博士

これまでインド文化は、その動的かつ複雑な構造の中、育まれてきた過程で、多様な文化とさまざまな移住者の統合とによって絶えず変遷してきました。ブッダ、マウリヤ王朝、そしてアショーカ王の時代は、インド史上の黄金時代と看做されています。しかるに、インドの大地は15世紀以降ともなると、カースト、肌の色、人種、宗教、言語、または国境に基づき虐げられし数多の人々(貧しい者、無視された者、未発達の者、搾取された者、差別された者、女性、労働者、指定カースト、指定部族その他の、後進階級などからなる弱者)に対する支配者の非人道的な振る舞いで悪名高い国となってしまいました。

ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル博士(ババサーヘブ博士の尊称で知られる)は、１８９１年４月１４日に、

当時ヒンドゥー教徒であったマハールらの集落に生まれました。その社会構成員は下位カーストと看做され、上位カーストのヒンドゥー教徒らに「不可触民」として遇されていました。この下位カースト出身であるということのために、彼は社会や公共のあらゆる場面において屈辱と差別的待遇に苦しみ抜きました。彼は、学生時代から息を引き取る最期の瞬間まで、これら邪悪な慣行と向き合い、解決策を提供することによって、社会および政治の改革に貢献しました。本稿では、いくつかの(氷山の一角に過ぎませんが)逸話を共有し、彼が企図せずして革命家にして碩学、虐げられし者たちの救世主となっていった過程を紹介します。

これら虐げられし人々の問題に取り組む彼のアプローチは、完全に時流とは真逆の方法であり、他の人々とは全く異なる流儀によっていました。彼は、仏教由来の自由、平等、友愛に基づいた哲学的原則を打ち樹てるため、社会、政治および宗教における過誤から経済的自由まであらゆる分野にわたる業績を残しました。インド共和国憲法の本丸として、彼はブッダの教えに言及しつつ、基本的人権すなわち「平等」、「自由」、「反搾取」、「信教の自由」、「文化および教育の享受」といった権利の尊重を唱えました。

1．インドのカースト制度は世界的な問題となる

1916年5月9日、B・R・アンベードカル博士は、(コロンビア大学)人類学セミナーで「インドのカースト制度:そのメカニズム、起源、展開」と題された論文を発表し、インド社会にはびこる暗黙の事実を告発しました。彼は、インド人にとっての局所的かつ複雑な問題とされているカースト制度が、今後、ヒンドゥー教徒が地球上の他の地域に移住するに及び、世界的な問題に拡大するだろうという、自身の真剣な意見を世界と共有したのでした。

2．カーストはあらゆる改革を妨害する凶悪な武器である

5月15日、B・R・アンベードカル博士はあるスピーチに向けた内容を、『カーストの絶滅』という本の形で出版しました。そのスピーチは、ジャット・パット・トダク・マンダルが主催したプログラムのゲストスピーチとなる予定でしたが、その後、イベントへの参加招待は取り下げられてしまいました。同書において、彼はバラモン(上位カーストのヒンドゥー教徒)にこそカーストの起源をめぐる責任があると考えていました。国の政治および経済の改革には、社会構造の認識とその変革が不可欠であるにもかかわらず、カーストが、ヒンドゥー教徒自身が現実の社会を改革することを妨げているという意味において、それはすべての改革を妨害する凶悪な武器であると喝破しています。

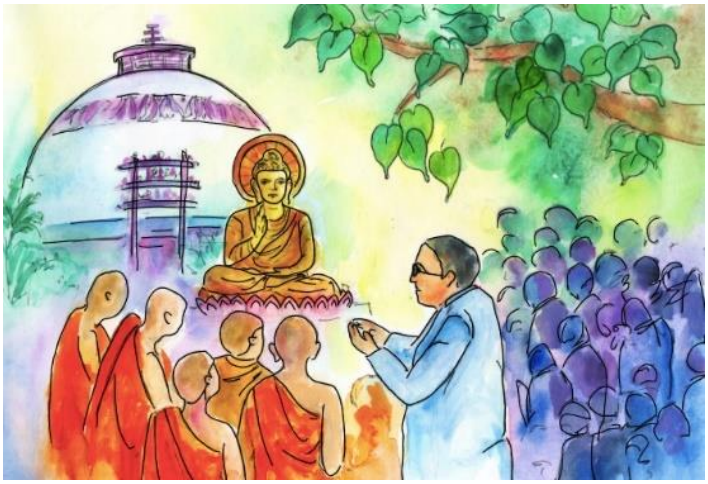
3．困難を克服する方途

1948年、ババサーヘブ・アンベードカル博士は、「言語州としてのマハーラーシュトラ」と題する論評を言語州委員会に提出しました。それは、州域をめぐり実行可能な主張とそれに対する反論、言語州の背後にある目的、困難、利点、困難を克服する方途、満足な解決策の要件、歴史、さらには人口、面積、収入などを含むデータの分析に焦点を定めたものでした。のみならず、彼は自分の意見として次のように強調しています、「単なる言語の統一、つまり、共通の言語を話す機関(州)が実現したとしても、本来、他の多くの要因の結果でもある均質性を、必ずしも保証するとは限らない」と。

4．科学的社会主義および共産主義:

1956年12月、ババサーヘブ・アンベードカル博士は、ブッダ(紀元前563年に生まれ、政治や経済としがらみを断った宗教の創始者)とカール・マルクス(1818年生まれ;新たな経済システムの設計者)の思想を比較した結果を詳述し、世人の多くの共感を呼ぶことになる草稿を完成させました。

ババサーヘブ博士は関連する議論をあらゆる側面から検討し、カーストと無縁な社会構想に基づくブッダの教理は、マルクスの共産主義よりもはるかにインドと親和性があり、インド人にとって適切であろうと明確に主張したのでした。



5．ブッダとそのダンマ

『ブッダとそのダンマ』は1957年、ババサーヘブ博士が民衆のため執筆し、ボンベイのシッダールタ・カレッジ出版会から出版した仏典です。なぜ仏教なのか、というよくある質問への答えとして、彼は「既に科学を知っている現代人が宗教を持つとしたら、その理性に適う唯一の教えは仏教である」と説いています。

畢竟、B・R・アンベードカル博士は普遍的な博愛精神に基づく、強力な統一インドを築くことを夢見ていたといえるでしょう。こうして革命家にして碩学、救世主たるB・R・アンベードカル博士は、虐げられた人々の状況を劇的に改善したのです。

ダス教育協会創立者
www.edu.dasucs.com

※ババサーヘブ・アンベードカル博士を日本語で紹介する動画
https://youtu.be/m8-6e-zljMc

（中村龍海訳）

アンベードカル博士「ヴァリシンハへの手紙」

冨士玄峰訳

デリー　1956年10月30日付

親愛なるヴァリシンハ様

1956年10月25日のあなたのお手紙、誠に有難うございました。

それは確かに偉大な催しであり、改宗のために名乗り出た群衆は私の期待を超えました。すべて上手くいったことを仏様に感謝いたします。

私は喜んでいます。我々が未来に向けて継続する発展を見なければならないこの事業を上手く始めるようにあなたが実現して下さったことをうれしく思います。私たちは、仏の教えに帰依し、私の言葉を受け入れた大衆に仏教の教えを与える方法と手段を検討する必要があります。私たちが人々に仏法を教えるためには多数の活動家を養成しなければならないことは疑いようもありません。しかしそのことを実行するための最良の担当者は比丘です。彼らは、素人の誰にもできない偉業を彼らと共に実行するでしょう。

私が思うに、比丘たちは、成されるべき大きな仕事が彼らを待っていることを知って大いに仕合せであるべきです。比丘にとって唯一の困難は彼らが彼等民衆の言葉を学ぼうとしないことです。私はサンガがその外見を変えて、彼らが世捨て人と成る代わりに、キリスト教の宣教師のような社会活動家や、社会的な布教師へと変っていくべきではないかと考えています。私が述べるように、今日、彼等はアラハン（聖者）でもなく、社会の有用なメンバーでもありません。この事実を彼らに痛感させ、彼らがダンマ（仏法）の説教者になることによって仏陀によく仕えることができるということを認識させなければなりません。

私は、比丘と在家者に仏教の基礎を教え、インドのさまざまな言語を学ばせ、さまざまな地域に派遣することができるように、ある種の理論的なセミナーを開くというあなたの考えに賛成いたします。

そのことに関するインドの若者たちの考えを知る限り、修道院的な思想を学ばせるようにすることは非常に難しいです。一番いい方法は、日本の結婚した僧侶のような、またプロテスタントのキリスト教徒が行ったようなことが可能だということです。そのために、私たちは彼らの教育期間中、そして彼らが僧侶として一般社会に出た後をサポートするための手段を見つけなくてはなりません。

ボンベイでの改宗式は、おそらく12月に場所を発表するでしょう、おそらく、多くの人々がそうでなければ得られない交通手段が得られるクリスマスの休暇中に場所を取れるでしょう。ボンベイの人々と相談した後、私はあなたに正確な日時をお知らせいたします。

私は貴方が「大菩提会会報」に、ナグプールの式典の全容を掲載して下さることを願っています。私は貴方に特に次の点を申し上げたいと思います。

1．最初の日、およそ38万人の人々が仏教に改宗しました。多くの人々が式典後に到着しましたので、翌日、2回目の式典がプログラム最初の項目として設けられました。

2．1956年10月16日にチャンダで別の会議があり、夕方に開催されました。また、別の改宗の式典が開催され、30万の人々が改宗しました。

3．昨日の新聞のニュース記事によると、私が去った後もアコラで再び改宗式が行われ、2千人以上の人々が改宗したとのこと。

4．その「Navyug」というマラティー紙は、ナグプールでの改宗式の式典に参加したイベントのいくつかの素晴らしい写真を掲載したこと。

5．私はあらゆる方面から手紙を受け取っていること。

もしあなたが「大菩提会会報」に記事を掲載して、写真を載せたいとお望みであれば、同じ写真を手に入れるのを手伝います。どうかお知らせください。

私たちのツアープログラムに関するあなたのお尋ねに関しては、貴方にお送りしたコピーに触れられております。

あなたは※※※ それ ※※を知ることでしょう。私はサルナートに参ります。

敬具

署名（B．R．アンベードカル）

インド大菩提会

シュリ D．ヴァリシンハ事務総長様

（解説）

藤吉慈海先生は論文「アンベードカルの仏教観」を以下の文章で結んでおられる。

「その目的はある程度達成せられ、彼の死後、新仏教徒の数は急激に増加していると報ぜられている。これらの新仏教徒の指導の問題がのこされているが、アンベードカルの遺志は必ず達成されるであろう。アナガーリカ・ダルマパーラを創立者とし、ヴァリシンハに継承されているインド大菩提会の仏教復興運動が主として仏蹟の復興とインテリを基盤とする運動であるのに対し、インド中部から西部の農村におこったこの新仏教復興運動が、今後どのような歩みをして行くか、注目すべきことである。その指導に挺身する日本仏教徒の渡印を要請して来ていることも、この際、深く反省してみなければならぬであろう。」と。（注：現在の我々関係者・支援者はインド仏教徒と呼んで、新仏教徒という呼称は自覚的に用いていません。）

そして運命の人、佐々井秀嶺上人は、タイの僧院からインドへ、ラージギルの日本山妙法寺仏舎利塔建設工事を手伝い、仏跡巡拝をしてから帰国しようとするそのときに、龍樹菩薩の霊告を受け、未知であったナグプールへ入られたのであった。アンベードカル没後12年目であった。

この「ヴァリシンハへの手紙」の中でアンベードカル博士が「一番いい方法は、日本の結婚した僧侶のような、またプロテスタントのキリスト教徒が行ったようなことが可能だということです。そのために、私たちは彼らの教育期間中、そして彼らが僧侶として一般社会に出た後をサポートするための手段を見つけなくてはなりません。」と言っているのは、アナガーリカ・ダルマパーラもヴァリシンハも来日経験があり、日本の僧侶のほとんどが家庭を持ちつつ活発に活動していることを実見し、感銘を受けたことを表明しており、それらをアンベードカル博士も読んで、関心を持っていたと思われる。大菩提会も博士も大乗仏教を高く評価していたのであった。

大菩提会、アナガーリカ・ダルマパーラ、ヴァリシンハの詳細についてはウィキペディア等を参照して下さい。

2020年4月14日『アンベードカル博士生誕祭ONLINE』

高山龍智

去る4月14日、日本で暮らす現代インド仏教徒による『第129回アンベードカル博士生誕祭オンライン』が開かれました。言うまでもありませんが、今年は新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受け、スカイプを活用しての開催となりました。

折しもこの日はインド政府が当初予定していたロックダウン（公共封鎖）の期限でしたが、同日現地時間午前10時、インド首相ナレーンドラ・モーディー氏はメディアを通じ、「5月3日までロックダウンを延長します」と発表。スピーチの冒頭、モーディー首相は「今日という日はアンベードカル博士の生誕記念日でもあります」と言いましたが、そもそも彼はカシミール問題に関し、アンベードカル博士が起草したインド憲法に〝初めて手を入れた〟首相なのですから、考えてみれば何ともおかしな話です。

ましてや、最初のロックダウン実施の際にはヒンドゥー神話『ラーマーヤナ』に記された「ラクシュマン・レカー（結界）」を Social Distancing のために引用しました。これは、憲法に定められた『世俗国家インド』の大原則に反しています。

そんな中、ふるさとを遠く離れ、アジアの東端で生活する改宗仏教徒たちは、おのおの #StayHome を守りながら、ネットを通じて

「**विश्व रत्न बोधिसत्व डॉ बाबा साहेब अम्बेडकर**（ヴィシュワ・ラトナ、ボーディサットヴァ、ドクタル・バーバー・サーヘブ、アンベードカル。世界の宝、菩薩、聖者アンベードカル博士）」

の生誕をお祝いしました。

この日に行なった私の法話（ヒンディー語）を要約すると、以下のような内容になります。

如来無上等正覚、そして菩薩聖者アンベードカル博士に帰依し奉る。

今日は第129回ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル生誕祭ですね。共にお祝いしましょう。

さて、皆さんもよくご存知のように、今や新型コロナウイルスが世界中に広がっています。ウイルスは、誰にでも感染します。しかし、社会的な弱者がもっとも苦しめられます。

そんな時、モーディーさんは「ラクシュマン・レカー（結界）」と言いました。つまり〝線を引け〟ということですね。

その線が隔てるのは、シーター姫と魔王ラーヴァナ、浄と穢、そしてヒンドゥー教とそれ以外の宗教でしょう。

三月末、首都デリーで開かれたイスラム教の集会「タブリギ・ジャマート」においてコロナの集団感染が起こり、ホットスポット化したことをきっかけとして、ヒンドゥー教至上主義者による他宗教へのヘイトクライムも発生しています。

これは、明らかに道を踏み外した振る舞いです。私たちが〝線を引く〟べきところは、知性と迷信・正義と不正義・寛容と不寛容、その間です。

最後になりますが、皆さん、忘れちゃダメですよ。

うがい、手洗い、そして正法（サッダンマ）をね。ジャイ・ビーム！

※今回のこの取り組みは、インドの仏教系ニュース・チャンネル「आवाज़ INDIA（インドの声）」でも大きく紹介されました。

※昨年のアンベードカル博士生誕祭のレポートを、高山師のnote記事より転載させていただきました。

インド現地報告

亀井竜亀

1月1日

ナグプールルンビニーナグリ開発土地のアンベードカル博士像落慶式に出席。つづいて、ラムテクナーランダ寺にて協会長マイスカル氏命日法要、ナグプールサッダルマ寺で協会員ラージクマル氏誕生会に参列されました。

インドの共和国記念日

1月26日。1950年1月26日にインド憲法が発布され、共和国となったことを記念する日。

朝から佐々井上人は、アンベードカルカレッジでの式典、インドラ寺、憲法交差点、Dr.アンベードカル国際空港へ、そしてインドラ交差点に新たに建立されたアンベードカル博士像落慶式に参加されました。

1月30日

Dr.アンベードカル大学スポーツアカデミー主催で行われたクリケット大会の表彰式に出席されました。

2月3日

マッディヤ・プラデーシュ州リドラにて山上9メートルの仏像建立に向けて地鎮祭、菩提樹植樹祭を行いました。

2月6日

チャッティスガル州ドンガルカル仏教大会

例年日本から南天会ツアーの皆さまが参加されていた仏教大会ですが、今年はコロナの影響で日本からは参加できず、しかし例年通り地元の人達で盛大に開催されました。佐々井上人は、山頂まで駕籠に乗って登られました。

２月７日
午前、ラマイブッダビハール/ナグプール
タイから供養された仏像の建立記念式典。

午後、コンダサワリ病院
無医村の巡回診療を行って3年目、毎年この事業を支えてくださる人達を招いて記念行事を開催しています。

２月１０日
佐々井上人の御弟子である
ナーガゴーシャバンテージ(８６歳)が
心臓発作の為御亡くなりになられました。
ナーガゴーシャバンテージは佐々井上人のブッダガヤ大菩提寺奪還闘争に参加され、２５年以上にわたって活動を共にされて来られました。
当日は朝の御勤めそして佐々井上人への挨拶を済ませて、自室ベッドの上で静かに息を引き取られました。
佐々井上人「美しい逝き方だった」
最後の最後まで菩薩道を全うされました。心より御冥福を御祈り致します。

２月１９日
マハーラシュトラ州議員ニッティンラウト氏御子息結婚披露宴にて導師をつとめられました

３月１１日
午前、マンセル文殊師利菩薩大寺にて東日本大震災物故者慰霊祭。
午後より、龍樹菩薩大寺にて龍樹山記念大祭。
今年はコロナ禍で大人数の集まりが禁止となり少人数での開催となりました。

（編集部より）
現在マハーラシュトラ州は４月３０日までロックダウン（夜間・週末外出禁止、食料品以外の店舗の閉鎖）となっています。インド全体としても昨年９月の感染拡大を超える第２波に突入し、累計の死者数は１６万人を超え、局地的にロックダウンや移動制限などが厳しくなっています。抗体検査やワクチン接種なども進められていますが、経済的な困窮も深刻な中、第２波の急拡大が懸念されています。
亀井師は、国際線の運航停止によるビザの特例措置で１年を超えるインド滞在となっており、日本からインドへ行くことが難しくなっている現在、佐々井上人の体調管理や日本との連絡などで大変な負担をお願いしています。是非日本からの応援よろしくお願いします。

【亀井竜亀インド滞在支援】
ゆうちょ銀行
口座番号　01390-3-107440
加入者名　亀井竜亀
※その他の金融機関から振り込む場合
ゆうちょ銀行一三九支店（イチサンキュウ）139
預金種目：当座　　口座番号：0107440
滞在支援隊としていろいろな業務をお願いしているお弟子の亀井竜亀さんへのご支援もよろしくお願いします。

ブッダガヤ大菩提寺裁判報告

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、インド最高裁でペンディングとなっているブッダガヤ大菩提寺奪還の裁判闘争に関し、佐々井上人と弁護団は１月２２日に早期の再開を求める陳情を行いました。　（中村龍海訳）

インド最高裁判所内
民事裁判控訴
訴状書面（民事）2012年No. 380
原告　アーリヤ・ナーガールジュナ　佐々井秀嶺上人　他
対
被告　ユニオン・オブ・インディア　他
早期の公聴会開催を求める原告申し入れ
名誉あるインド最高裁判所長官　及び　判事各位　殿
＜原告陳情書＞
謹んで陳情いたします。
1．上記訴訟は名誉ある貴裁判所にて係争中であり、その内容については簡便を図り、また繰り返しの煩を避けるため、添付の書類をご高覧ください。
2．当初、原告１と他の原告は、名誉ある貴裁判所にて未決の訴訟の係争が、連合政府自身により問題解決が図られる旨、政府から伝達された1992年のNo. 871と1993年のNo. 65の訴状書面（民事）を提出していました。原告1は一旦、名誉ある貴裁判所を離れ、争議の問題が解決されない場合に訴状を再提出するため、これらの訴訟を棄却しました。
3．長きにわたる待機を忍受したにもかかわらず、1949年の「ボドガヤー寺院法」の違憲条項により、原告と数多くいるインド仏教徒らは、ビハール州ブッダガヤー大菩提寺の独占的な管理権を拒否されました。
4．最終的に、原告は2012年７月に名誉ある貴裁判所に職務執行令状および/またはその他の適切な令状/命令/指示を求め、1949年の「ボドガヤー寺院法」第３項(2)、第３項(3)へのただし書き、第10項(1)(d)、第11項(1)、第12項および第16項は、インド共和国憲法第25条および第26条に違反していること、ブッダガヤー寺院管理委員会のメンバーは仏教信仰を公言する人物にのみ認められること、被告１および２がブッダガヤー大菩提寺の管理と管掌が仏教徒だけに委ねられ、非仏教徒がブッダガヤー大菩提寺に非仏教の宗教的慣習と儀式を持ち込むことに対する制限を保証するよう命ずること、と宣言する本訴状書面提出に至りました。
5．ユニオン・オブ・インディア（ここでいう被告1）は、2013年８月30日にLd. ASG（弁

護士)が発した声明に従って、反対宣誓供述書を提出することをしませんでした。

6. ビハール州(被告 2)は回答を提出し、これに対して原告は第二宣誓供述書を提出しました。

7. 2013 年 9 月 27 日付け命令参照：名誉ある貴裁判所は、同書面で訴状の手続きが完了したことを喜ばしいこととされました。したがって、同書面による請願書は、2012 年の訴状書面(c)41 とともに、しかるべき日を定めての最終処分のため、リストに追加されるよう指示されました。

8. 本訴状に関連する問題は、インドの仏教徒はもとより、世界中の仏教信徒の感情、信念、宗教的慣行に影響を与えるという点で、国際的に重要であるため、この訴状内容を優先的に成立させるよう命令することが必要でもあり、かつ適切です。そのためにも、訴状に関する早期の公聴会開催と処分命令の成立とを、お願い申し上げます次第です。さらに、本訴状の件を追及してきた 1955 年、日本生まれの比丘すなわち仏教僧である原告1は、今では非常に高齢となっており、彼の健在なうちに本訴状に関する最終的な裁定が見られるよう、熱意をもって委ねておられます。

＜宣誓＞

よって、名誉ある貴裁判所が、

a) 2012 年の訴状書面(c)41 とともに、上記訴状書面を早期に審理するための適切な命令を成立せられんこと

b) 適切かつ妥当であり、正義の利益のためであるとみなされる他のさらなる命令を可決されんことを、最大限の敬意を表して祈念いたすものです。

原告代表
レーカ・パンディ
ニューデリー
2021 年 1 月 22 日
インド最高裁判所
民事上訴管轄権
訴状書面(民事)2012 年 No. 380
原告　アーリヤ・ナーガールジュナ 佐々井秀嶺上人 他
対
被告　ユニオン・オブ・インディア 他

＜宣誓供述書＞

故・佐々井アキコの息子で、マハーラーシュトラ州、ベゾンバーグ、インドラ・ブッダ・ヴィハーラ在住の私、アーリヤ・ナーガールジュナ 佐々井秀嶺 85 歳は、ここに次のように厳粛に誓い申し述べます。

1. 私は、上記訴状書面の原告 1 であり、本件の諸事実や状況に十分精通し、本宣誓供述書を誓う資格を有します。

2. 添付した早期の公聴会開催を求める申請書は、私の指示の下で作成および起草されたものであり、その内容は私の知識に照らして真実、かつ正しいものであります。

宣誓証人
(佐々井師署名)

証明：
この宣誓供述書の内容は私の知識に照らして真実、かつ正しいものであり、そこから何事も隠匿されていないことを、2021 年 1 月 22 日にナグプールにて確認しました。

宣誓証人
(佐々井師署名)

パウニ大仏像復旧経過報告

昨年4月、巨大暴風雨によって倒壊したパウニ大仏像(龍族19号にて告知)は、皆様からのご支援をいただき、修復作業が進んでいます。胴体部分の復旧が完了し残りは頭部のみとなりました。ご支援誠にありがとうございます。

佐々井秀嶺資料室　デジタルアーカイブプロジェクト

２０２０年１２月５日６日、Ｂ．Ｒ．アンベードカル及びエンゲイジド・ブッディズム研究会(ＢＲＡ研)の鈴木晋一先生、根本達先生、佐々井資料室小林、の資料保存チームは、茨城キリスト教大学にて写真家の福持英助氏の指導により、佐々井師日記のデータ化を再開いたしました。

資料室では２０１３年、２０１４年とインドにて福持氏により約２万点の資料撮影を終了しており、２０１６年よりインドから日本に全資料を移動させ、保管していました。

(JSPS 科研費 JP20H01401 とトヨタ財団２０１９年度研究助成プログラム事業)

南天会会費・支援金（2020年12月１日～2021年３月31日）　707,181円

【特別支援金寄付者ご芳名】

※上記期間中に年会費とは別に支援金をいただいた方のお名前です。

伊藤友人　井上聡史　今村美津子　漆間宣隆　大岡千尋　大橋裕　小笠原隆元
岡本法治　荻須眞教　奥平心月　甲斐三晴　景山しのぶ　岸信一郎　黒川浄慧
小池一郎　小山美津江　坂田龍晴　佐々木一憲　嶋﨑実　嶋村可奈　下村栄美
白井昌子　杉本玄海　竹原路晴　武山博子　長泉寺　土屋信裕　手塚龍天
土居奈生子　冨樫幸子　土岐信子　中岡千恵　中川豊俊　長瀬拓磨　並河正人
成山昌夫　西村和代　初見巻子　原田裕介　平野文興　福島和枝　福瀬くに子
本多末男　三宅初美　宮崎智和　吉崎光徳　李道道　渡辺典子
（五十音順　敬称略）

その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

【各イベントにおけるカンパ・書籍頒布などの支援金】
１２／１７、１８　「ジャイビーム！」名古屋上映会　物販と支援金・・・・・・２４２９０円
１２／１９、２０　「ジャイビーム！」岡山上映会　物販と支援金・・・・・・・・４４０００円
関連書籍・ＤＶＤ等販売・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８４００円

【ブッダガヤ大菩提寺裁判費用支援者】
東京都　甲斐三晴　　20000円

【期間中主な支出（１２／１～３／３１）】
龍族印刷・発送経費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７７２３０円
頒布書籍・ＤＶＤ購入・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１８８００円
国際荷物発送・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８００円
南天会事務費　（郵送費・印刷費・通信費等）・・・・・・・・・９３１４円
慶弔費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３００００円

※支援金は、定期的にインドの佐々井上人の口座に送金しております。
※本年も佐々井上人の来日については、難しい状況となっており、例年同様の支援を準備するために、会員・関係者の皆様のご協力を必要としています。
※映画ジャイビーム！上映会、佐々井上人関係映像等の上映会、またオンラインでの各種イベント等を是非企画開催してください。事務局より会報『龍族』、南天会案内、関連書籍等を提供いたします。
※会員増強にご協力ください。南天会パンフレットはホームページからダウンロードできます。
※関係書籍・DVD頒布いたします。事務局までお問い合わせください。
※世界中が大変な時ですが、今後ともインドへのご支援をよろしくお願い申し上げます。

あたたかいご支援ありがとうございます

◆**南天会現況**（令和３年３月３１日現在）
正式会員数　２１６名
龍族発送者　３６７名
※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆**賛同人**（５０音順）
漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）
奥平心月（釣月庵庵主）
織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）
小野重徳（仏国土の会会長）
黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）
小池一郎（株式会社マクシス・シントー常務取締役）
高山龍智（佐々井上人お弟子）
土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）
冨士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）
宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職）
宮本光研（真言宗御室派元執行）
宮本龍勝（佐々井上人お弟子）
山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について
当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。
※世話人について
南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで
【金融機関】ゆうちょ銀行
【加入者名】南天会
【口座番号】０１３８０－０－９０１６４
「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。
※他金融機関からの振込用口座番号
　店名（イチサンキュウ）一三九店（１３９）
　当座　００９０１６４

会員種類と年会費
支援会員　１０，０００円（会費＋支援金）／年
一般会員　　５，０００円／年
学生会員　　２，０００円／年（※大学生まで）
※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。
例：一般会員令和３年入金済→　一般Ｒ３

（南天会事務局）
〒710－0004
岡山県倉敷市西坂1582－1
一心念誦堂内
TEL　086－463－9391
佐伯隆快（090－5304－8955）
小林三旅（090－4538－2677）
南天会ホームページ　www.nantenkai.org
メール　nantenkai@gmail.com
南天会フェイスブック、ツイッター、YouTube
ご利用ください。

佐々井上人専用車寄進のお願い

龍族17、18号で告知しておりました専用車寄進について、引き続き募集いたします。これまでに50万円の寄付をいただいており、必要な金額（200万円）に達しましたら購入手続きに入ります。
現在も佐々井上人は、各地の行事に出張され、その都度関係者から車を借りている状態で、長距離移動などに耐えられる車が必要不可欠となっています。何卒ご協力の程、お願いいたします。

南天会支援金振替用紙に、「専用車寄進」と記入いただき、一口10000円にてお振込みください。
寄進者のお名前を車体に印字いたします。

龍尾言

昨年末に映画「ジャイビーム！」岡山上映会の宣伝で、市内のチェーンのインド料理店に行った。お昼時で忙しそうに動き回るインド人らしき店長さんにチラシを見せると、「OK！そこに置いときますね。」と軽く応じるので、「ジャイビーム、知ってます？」と聞いてみると、「もちろん知ってます！ビームラーオ・アンベードカル。インド最初の正義の人ですね。」と即答。正義とは Justice Minister 法務大臣のこと。あまりにも忙しそうにしているので、チラシを持って写真を撮らせてもらい、「ジャイビーム！」と言って店を出た。仏教徒なのか、佐々井上人のことは知っているのか、聞けなかったけれど、振り返るとバンテージの袈裟と同じ臙脂色の服を着た店長さんは一瞬合掌して急いで店の中に入って行った。（佐伯）